

---

# ラジオアクティビティ

岡田健四郎 ZOMBRA Y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラジオアクティビティ

### 【Nコード】

N8721X

### 【作者名】

岡田健四郎 ZOMBRA Y

### 【あらすじ】

大羽中学校生徒達は修学旅行でアメリカ合衆国ニューメキシコ州に滞在。しかし、バスが砂漠のど真ん中でパンク。かつてそこは核実験所だったが、今も無人の地だった。携帯電話も圏外で焼きつくような暑さと植物1つない乾燥地だった。救助を待つはずだったが、楽しいはずの修学旅行が、狂気と戦慄の戦場と化する

## プロローグ

突然変異、か。

フィクション作品で生物が突然変異して怪物にあるものが多い。ウイルスやら、放射能やら、ガンマ線やら、原因はさまざまだ。まあどれも今の世代では科学的にありえないと思われがちだ。特に日本は世界で唯一の原子爆弾被爆国だ。核兵器を被爆した唯一無二の国だ。

今は福島原発もある。どんだけ放射能に汚染されるんだよって突っ込みたくなつたな。

いずれにせよ、俺達は後に悪夢の世界に放り込まれる。血と死臭と恐怖がべつたりと塗りたくられた狂気の世界に取り込まれたんだ

楽しかったはずの行事が、眼を覆い隠したくなるほどの狂気の行事となった

## プロローグ（後書き）

どうも、作者の岡田健八郎とZOMBRA Yです。僕は国語の作文が得意分野です。さて、感染者シリーズの登場人物を使った別作品を作ろうという企画がありました。それが本作です。

感染者シリーズと時間の切り盛りを適切に分けたいと思います。

また、ご朗読した方はご感想をください。おねがいします。

これからよろしく願います

## 楽しい旅行（前書き）

### 【主要登場人物】

2年2組男子

相沢 信二（あいざわしんじ）

本作の主人公。ロックをこよなく愛し、国のやり方に不満を抱いている。事故で母親が他界したため、他人の家族をうらやましく思っている。父親は法律の関係で、かつ人を助ける仕事をしていたという。黒髪でクールな性格。かつて野球部に所属していたが、トラブルを起こして退部になる。陽気な性格で、何事にもめげない精神力を持つ。本人はまるで自覚が無かったが、2組女子の間で人気が高くモテる。運動神経も良く、100メートルを10秒台で走れる。なお、少なくとも岡本紘輝、立花裕香と同じ小学校出身である。

岡本 紘輝（おかもとひろき）

信二の唯一無二の親友。信二を上回る運動神経の持ち主だが、美術部に入ったため、才能の無駄遣いと同級生に言われた。容姿も悪くないが、異性にはまったく興味がなく、全員同じ顔に見えるとの事。実は秘密裏に立花と交際している。  
キリスト教入信者。

安藤 真人（あんどうまさと）

大羽中学校最速の男という異名を持つ。面倒くさがりやだが、信念は突き通す。

性格は温厚だが、大切な人を傷付けられると激怒し我を忘れる。かつては剣道部に所属していて、実力もトップクラスだが、県内大会で右手首を負傷したため自ら退部。後に陸上部に入る。

梶尾 聖夜（かじおせいや）

サッカー部副部長。

波川五右衛門

剣道部最強の男。無口で無愛想なため、近寄りがたい存在だが、性格は優しい。

鋭い目つきが特徴。

2年2組女子

ソフィー・ヴェルネ

外国人の女子。美しく長い金髪を持ち、誰もが見とれる青い眼の美女。国語以外の教科を得意とする。信二に想いを寄せているが、中々告白できない。

精神面ではしっかりしている。

立花 裕香（たちばなゆうか）

学表。美しく長い黒髪を持ち、アイドルスターのように愛くるしい容姿だが、真面目な性格。得意教科は美術で苦手科目は音楽。

秘密裏に絃輝と交際している。

坂本 真希（さかもとまき）

生徒副会長。眼鏡をかけた美少女。信二とは友達以上恋人未満の関係。

何事にも面白がる性格で猫好きのため、語尾にニヤァが付くこともしばしな。

石川 紀子（いしかわのりこ）

新聞部副部長。眼鏡をかけているが、視力が悪いわけではない。真人に想いを寄せている。

伊藤 海咲（いとうみさき）

しつかりとした性格。

佐々木 奈々子（ささきななこ）

剣道部最強の女子。尻まで髪が伸びているポニーテールの美女。真人を根性なしと呼び、軽蔑してるように見えるが、実は惚れている。

教師

黒木 大輝（くろきたいき）

信二曰く「最狂の教師」

歴史担当の教師だが、元生物学者のため、理科の2分野代理でもある。

黒いショートヘアに鋭い目付き、洪い声などから女子から人気がある。

体罰はしないが、授業を妨害するものはトラウマに残るくらい恐ろしい説教をすると言われている。百合とは仲がいいが、喧嘩すると負けるらしい。

黒木 百合（くろきゆり）

大輝の妻。柔和な人柄と親しみやすさから「学校内の聖母」といわれている女性。

国語担当。圧倒的な美貌を誇り、彼女を尊敬する女子が多い。

敬意を込められ「ナイチンゲール」と呼ばれているが、本人は嫌がっている。

大輝も彼女と喧嘩すると負けるらしい。

蛇谷 古代（へびだにこだい）

体育担当。強靱な肉体を誇り、彼に逆らう人物はいない。

ロンメルを尊敬している。

## 楽しい旅行

修学旅行は楽しい行事だ。家族旅行とは訳が違う。とりわけ今年  
はアメリカ旅行だ。

バスが出発してから数時間。あたりは緑の木に囲まれていた。つ  
まり山の中だ。

「全員立ち上がっていいぞ」

担任の黒木大輝が大声で言った。その瞬間、大勢のクラスメイトが  
席から立ち、他の席に行った。

信二は一番前から4番目の左の席に座っていた。窓側は信二の唯一  
無二の親友岡本大輝だ。

「なあ、お前は『RECノレック』って映画見たことあるか？」

大輝がそう聞いた。聞いたことない映画だな。

「いや、見てない」

「そうか：俺も見えてない。R15指定作品だからな」

15歳未満観賞禁止指定映画か：てことはグロだな

「し、信二君」

いつの間にかソフィーヴェルネが横に立っていた。

「よ、良かったら、食べてくれる？」

そう言つてクッキーを渡した。

「じゃあ、2枚貰うよ」

信二は2枚クッキーを二枚貰い、1枚を大輝に渡した。

2人は同時に食べた。

「うまい！うまいな信二！」

「ああ！見事なクッキーだ！」

お世辞なしで本当においしかった。

「ありがとう！そういつてもらえて本当うれしいよ」

「お前が作ったのか？」

「うん」

さすがフランス人。信二はそう関心した。しかし、この味を覚えてしまうと市販のクッキーでは満足できなくなってしまうな。

後ろの席から誰かが覗いてきた。

「立花、何のようだ？」

「紘輝君、これ食べて」

立花はポテトチップスのり塩味を渡した。これは大輝の好物の1つだ。

「何の風の吹き回しだ？」

「私は嫌いな。親が勝手に買って」

「残杯処理か：ありがたくいただくよ」

大輝は袋を開け、食べ始めた。後ろの席はソフィーと立花：前の席は誰だっけ？

そんな軽い気持ちで前の席を覗き込んだ。

そこには、貞子の顔が：

「うわあ！」

信二は思わず叫んでしまった。

「びびった？」

坂本真希が貞子の画像を折りたたんで聞いた。

「悪趣味だな」

「ニヤー」

ニヤーって：おいおい勘弁してくれ。反省の態度なしかよ。

真希の隣に座ってる安藤真人は気分が悪そうだ。

「大丈夫か？」

「話：掛けないでくれ：うっぶっ！」

瞬時にして悟った。だが、真希に聞いてみよう。

「こいつはどうした？」

「車酔い防衛戦中、自身の体の中の自衛隊を出勤させ、胃と戦ってるニヤー」

ニやるほど…頑張れ真人の胃！負けるな！吐くな！

俺達の隣の席の2人のオタク…すなわち鳥縁とトリエンがPSSPで

プレイステーションポータブル

何かしている。

「何してる？」

「モンハン3hd」

日本人のトリエンが答えた。こいつら車酔いしないのか？ある意味化け物だな。いや、放射能を浴びて突然変異したミュータントだな。信二はそう思いながら席に座った。

その時バスが大きく揺れた。

「皆大丈夫だ、安心しろ」

大輝はそう言った。

真人の胃は限界に達したらしい。

「坂本…エチケツト…袋…あるか…？」

「ない」

真人は絶望に駆られた。神様！仏様！天使様！唯一絶対神様！この私にエチケツト袋を！

真人はそう願った。

「まったく、情けない奴だな」

佐々木奈々子がエチケツト袋を持った。

「かつて最強の剣道部員だったお前が、この様だとは、負け犬」

「助け…て…」

「ほら、使え」

奈々子はエチケツト袋を渡した。真人は吐いた。

「はあ、はあ、はあ、ありがとう」

「次はちゃんと用意しろよ」

「あれ、お前リボン変えた？」

真人が奈々子の髪の毛を結んでいるリボンを見て聞いた。

「か、変えたぞ。それがどうした」

「今の色は桃色、前より可愛いぞ」

「か、可愛い…そうか…そうかそうか！」

奈々子はテレながら自分の席に座った。

「しかし、長い旅だな」

信二は欠伸した。

その瞬間、突然眠気に襲われた。

「眠いな……」

3秒もしないうちに、信二は深い眠りに着いた

## 見知らぬ青空

「起きて、信二君起きて」

ソフィーが信二の体を揺らして、起こそうとしていた。

信二は目を覚ました。

「う、うん…ん…もう着いたか？」

信二は自身のほつぺたを叩き、眠気を飛ばそうとした。

「うん、まだ」

「じゃあ、もう一眠りするわ」

「そうじゃなくて！パンクしてるの」

「何だ、たいしたことないじゃん……………パンク?!?!?」

信二は窓の外を見た。前までの緑豊かな森とは打ち変わって、乾いた殺風景な砂漠が当たり一面に広まっていた。

「ここは…どこだ？」

「たぶん、ニューメキシコ州」

「メキシコ州？俺達はカリフォルニア州に向かってたはずだぞ」

「でも、私の知ってる限り、こんな砂漠地帯はニューメキシコ州としか…」

信二は席から立った。ソフィーを覗けば、教師も含め、全員眠っている。

「皆起こす？」

「いや、やめておこう。それより一旦外に出て様子を確認しよう」

そう言って信二は旅行用バスの扉を開けた。

外は暑かった。どのくらい暑いかって？真夏の東京並み、あるいはそれ以上だ。

冬の寒さが懐かしい。が、冬になると夏の暑さが懐かしくなるだろう。

ソフィーも降りてきた。

「あつっ！冬の寒さが懐かしいよ」

信二と同じ事を言った。

「ちよつと周囲を見てみようか？」

「う、うん」

信二はソフィーを連れ、真っ直ぐに進んだ。焼け付くような暑さを耐えながら。

一体どれくらい歩いたのだろうか。

大きなクレーターに出た。

「ここ、どこだろうね？」

「さあな」

ソフィーの質問に適当に答えた。まるで隕石が落つこちた後だ。

そのクレーター - の遙かさきに、1軒の小屋があった。

「お前はここで待ってる」

「あなたは？」

「向こうに行く」

そう言つて小屋に向かった。

小屋に着いた。この粗末な建物は、もう長いこと手入れされないな  
いように見えた。窓は割れ、板壁も所々シミで汚れている。しかし、  
何者かが生活している気配があった。

中に踏み込むと、暖炉には赤々と炎が燃えている。薪はまだくべ  
られたばかりのようだ。この真新しい痕跡は、火を扱えるものが生  
活していることを明確に示している。

だが、本当に……ここに住むのは人なのだろうか？

奥まつた中2階の机に、古びた写真と日記が置いてあつた。写真  
には大勢の子供や大人が写っていた。日記は英語で書かれているた  
め、完全解読には時間がかかる。壁には新聞紙が何枚か飾つてある。  
入り口の扉がきしむ音が響いた。階下を覗き込んだ視界の端を、

何者かが通つた。

その人に電話か何かを貸してもらおうと、暖炉の部屋に戻つた瞬  
間。

信二は頭に強い衝撃を受けた。

意識が遠退く中、信二は悟った。小屋に入ってきたのは尋常ではない人、サイコパスか殺人鬼であることを。元々こんな暑い中、暖炉に火をつける事態おかしい。

もしかしたら、俺死ぬかもな。

そこで思考はぷつりと途絶えた。

## THE BEAST

ソフィーは一瞬前方によるめいた。

「立ちくらみだ」

信二が遅かった。だが、何より腹立たしいのは暑さだった。真夏のような焼け付く暑さにはソフィーはいら立っていた。

信二の向かった小屋とは別の建物を見かけた。モーターのような形をしている。

もしかしたら、人が居るかも。そんな思いで歩こうとした。

だが、信二の注意を思い出した。

「いけない！私の弱点はクラス1の好奇心と大胆さ。注意しなくちゃ」

しかし、なぜかモーターに向かってみたかった。好奇心ゆえか、あるいは本能か、はたまたこの暑さから抜け出したいのか、理由は自分でも分からなかった。

1歩前に踏み出した。

「安全確認よ。ただの安全確認」自分の言い聞かせるように言った。もつとも、何のための安全確認かは本人も分かっていない。ソフィーはモーターらしい建物に向かった。

モーター前にはガソリンスタンドがあった。古びたワゴン車が1台止まっていた。

ソフィーは建物内に入った。

「ごめんください」英語で言った。中は意外に暗かった。カウンタ―には誰も居ない。

「誰か居ませんか？」

いくら呼んでも返事が来ない。仕方なく、廊下に出た。部屋1つ1つを見た。

誰も居ない。少し哀しい気持ちになった。

「誰も居ない…戻ろうか」

その時、何か割れる音がした。悲鳴こそ出さなかったが、一瞬びくついた。

「な、何？」

音はカウンターからした。カウンターに向かってみると、何も異常はない。

カウンターの奥に扉があった。

ソフィーはカウンターを乗り越え、奥の扉に入った。

中は事務所っぽい感じであった。部屋の中心にソファが置いてあり、ソフィーの前にはテーブルがある。部屋の奥には社長席っぽい机と椅子があった。

「すいません、誰か居ませんか？」

見た限り誰も居ない。だが、机の上に書類が散らばっていた。

ソフィーは書類を覗いた。

よく見ると書類ではなく、新聞の記事とメモ帳だった。

ソフィーは新聞の記事を読んだ。

「核実験エリアの立ち退き否定の家族。命知らず」

別の新聞を読んだ。

「政府、核実験による遺伝子的影響を否定」

別の記事を読んだ。

「ニューメキシコの砂漠は無人化。ゴーストスポットに」

別の長い記事を読んだ。

「ニューメキシコの砂漠にて行方不明者続出。一時期、核実験による突然変異生物<sup>ミュータント</sup>の仕業と騒がれたが、真相は闇の中。政府の正式発表はなし」

突然、背筋に寒気が走った。

ソフィーは事務所を出ようと振り向いた瞬間、1人のアメリカ人老人が座っていた。手には散弾銃<sup>ショットガン</sup>イカサM37があった。老人はウイスキーをラッパのみした。

「お嬢ちゃんは中学生か？」

「は、はい」

「そうかそうか気の毒に」

男はウイスキーを飲んだ。

「気の毒って、何がですか？」

「巻き込まれたんだよ」

男はまた飲んだ。

「何にですか？」

「俺はな、あれだけ反対したのに、連中は本当にやりやがった。クレイジーだぜ」

「あ、あの、話が分かりません」

「ありえないんだよ！！連中のやり方が！」

ソフィーはびくついた。

「くくく……終わりだよ。もう疲れた。あいつらの面倒を見るのも」

男はイカサをソフィーに向けた。

「う、撃たないでください……！」

「ふ……死よりも恐ろしい恐怖が待ってるぜ」

男はコツキングした。弾は装填され、発射準備完了だ。

「やめてください！」

男はイカサを下ろした。

「冗談だよ」

ソフィーは安心した。だが、男は自分の頭に銃を向けた。

「な、何を……！」

「言っただろ？疲れた」

男は引き金を引いた。散弾が男の頭を文字通り粉々に吹き飛ばした。

ソフィーは啞然とした。次の瞬間、吐き気に襲われた。

近くのゴミ箱に走った。吐かなかったものの、あれはトラウマになった。

「はあ……はあ……どうして自殺なんか……？」

ソフィーは事務所を出た。カウンターを乗り越えて、モーターを出た。

その時、何者かに後ろから口を塞がれた。

「んん！」ソフィーは抵抗した。

「静かに！」男性は怒鳴り、ソフィーをモーター内に入れた。

「何をするんですか！」

「化け物が外に居る」髭の生えた男はそう答え、事務所内に入った。そして、自殺した老人のイカサを持ってきた。

「あいつらは真の化け物だ」

ソフィーは苛立ちながら聞いた。

「化け物って何ですか？」

「そのままだよ」

男性は窓から外を見た。男はコッキングした。銃の空薬莖は排出され、弾丸が装填された。

「あの化け物たちめ！殺してやる！」

男は窓の外を見続けた。

「化け物って、何の化け物ですか？」

「異形な連中だよ！」

男が怒鳴っていると、何かが窓を割って、男の右目に刺さった。矢だった。弓矢の矢だった。

ソフィーは悲鳴を上げた。男は倒れこんだ。

思わず外に飛び出してしまった。すると、捕獲用の網が上から落ちてきて、ソフィーの自由を奪った。

次の瞬間、後頭部を何者かに思いつき殴られ、気絶した。

信二は目を覚ました。小屋の暖炉の前で倒れていた。

「……！ソフィーが危ない！」

本能的にそう思ったか、信二が小屋を飛び出し、ソフィーがいた場所に向かった。

だが、ソフィーは居なかった。

「糞！何処だ！」

すると、遠くで何かが引きづられていた。ソフィーだった。小柄のポロポロの服を着た男がソフィーを引きずっていた。

「あいつ！」

信二は男に向かって走った。そして、追いつくと思いつきりタックルした。

男はソフィーを離し、倒れた。

「ソフィー大丈夫か？」

気絶していた。信二は男を見た。その時は絶句した。

男は水疱瘡患者のような顔をしていた。何ヶ月もシャワーを浴びていないのか、異臭がする。

小柄の醜い男は小型の鎌を出し、信二に切りかかった。

信二は避け、男の顔に右ストレートを食らわせた。

男は怯んだが、再び切りかかった。信二は鎌を持った右手を両手で押さえ、男の睾丸を蹴りこんだ。

男は悲鳴を上げ、倒れこんだ。信二はすかさず男の後頭部にエルボを食らわせた。

男は気絶した。男はガムテープを持っていたため、それで男を縛った。

「ソフィー大丈夫か！」

ソフィーは目を覚ました。

「頭が…痛い」

「立てるか？」

「どうにか…」

信二はソフィーを立たせ、バスに向かった。

遠くの岩場の上で、カウボーイのような格好をした男が双眼鏡で

信二達を見た。トランシーバーで連絡を取った。

「今度の獲物は威勢がいいぞ」

『狩り応えがあるな』

## 異形者

岡本紘輝は物音を聞いた。衝撃が、体を、貫いていった。<sup>ショック</sup>窓ガラスを、とんとん、とんとんと、叩いたような音だった。

はっと顔を上げ、眠気を吹き飛ばした。手元の書物が滑り落ち、床に当たった音で全身を痙攣したようにびくついた。それから

なんだ、ただの雨の音か。紘輝はほっとする。激しい雨が、窓に降りつけているのだろう。

いつ降り出したのか、いや、それよりもバスが揺れていない。停車中か？

外を確認するために窓を覗いてみた。目を擦り、もう一度眺めたが、寝る前の美しい緑溢れた森林など何処にも無く、見ているだけで喉が渇く砂漠が目の前に広まっていた。エジプトのような美しい砂だらけの砂漠ではなく、植物や水、サボテンなどは一切無く、大きな暑そうな岩山やひび割れた地面だけのある意味悲しい場所だ。

太陽の焼け付くような光が窓を貫通し、紘輝の体を温めていた。今は冷房が聞いているから涼しいだろうが、きつと外は真夏の東京並み、あるいはそれ以上かもしれない。彼は疑問に思っている。なぜエンジンが掛かっているのに、バスは発進しないんだろう。

そんな疑問を解決するため、運転席を見に行った。自分以外のクラスメートは全員熟睡していた。紘輝は運転席を見た。運転手は居なかった。

バスの扉を開けるレバーを引き、扉を開放すると、バスの外に出た。案の定、バスの外は暑かった。

紘輝はバスをぐるりと一周したが、バス運転手の姿は無かった。ため息をつき、バスの中に戻ろうとしたとき、バスの右前車輪を見た。タイヤがパンクしていた。まさかと思い、全てのタイヤを見たが、パンクしていた。紘輝は座り込み、タイヤの破損部分を見てみた。何か刃物で切りつけたような跡があった。

その時、何者かが肩を叩いた。

紘輝は振り返ると微笑し、立ち上がった。

「何だ、立花か。驚かすなよ、寿命が縮んだよ」

立花裕香が真顔で立っていた。

あどけなさの残る愛くるしい顔、清潔感のある、腰まで届く長い銀髪。銀髪は恐らく母か父の遺伝だろう。いつ見ても幼さが印象的の可愛い奴だ。

「脅かしたの？ごめんなさい」

立花は申し訳なさそうな顔と声で謝った。

「いいんだよ」

「でも、寿命が縮んだって…」

「例えだよ！た・と・え！」

こいつは成績はいいが、ジョークが通じない女子だ。太陽の光が2人を照らしていた。

「こんな暑い外より、涼しい中に行こうぜ」

「暑いのか？」

「暑くないのか？」

「私は丁度いいくらいかな」

紘輝は絶句した。確かに汗は掻いてない。それどころか、清々しい顔をしている。立花の体は完全に狂っていることを、紘輝は実感した。

「じゃあ、少し歩くか？」

「いいの？」

「運転手が居ないんだ。大丈夫だろ」

紘輝は何も考えずに、適当な方向へと歩いた。立花は付いていった。

「ここ、どこだろうか？」紘輝は少し期待の気持ちを持って聞いた。

「分からない。メキシコかな」

メキシコ…確かにイメージ的にはありえる。そんな考えを持ちながら歩いていると、赤い跡があった。

「何かな？」立花は首を傾げた。

絃輝は赤い跡に駆け寄った。近くで確認してみた。

間違いない、乾いてはいるが、動物の血痕だ。引きずられていったような血痕が岩場の裏まで続いていた。

「裕香、ここで待ってる」

「どうしたの？」

「いいか、何かあつたらバスまで逃げろよ。いいな？」

立花はうなずいた。それに満足した絃輝は血痕を辿ってみた。岩場の裏に行ってみるとそれはあつた。

死体だった。別のクラスの男子の死体がうつ伏せに倒れていた。

絃輝は祈りの言葉を呟きながら、死体をひっくり返した。その時、激しい吐き気に襲われた。

死体の腹部に大きな切り傷があり、内臓が文字通り綺麗に抜かれていた。

よく映画では平気で見ていたが、生の死体は映画より生々しい。当たり前だが。

内臓が無いのは幸いだった。内臓が残っていたら、恐らく吐いていたろう。

よく見ると、男子生徒の右腕も切れていた。その時絃輝の神経は過敏になった。小さな音でも敏感に察知し、この場から逃げ出したいという本能を感じた。ここは本能に従ったほうがいいな。

絃輝は一目散に立花の所に駆け寄った。立花は待っていた。絃輝の落ち着かぬ様子を見て、不安を感じた。

「今すぐ逃げよう！」絃輝は深呼吸しながら言った。

立花は冷静に聞いた。「どうしたの？」

「いいから！」

絃輝は何かの気配を感じたか否か、岩場の上を見て、呆然とした。立花も岩場を見て、絶句した。

地面から3m高い岩場の上で、ボロボロのtシャツと半ズボンを着た大柄の男が、人の右腕を食っていた。

その顔は文字通り異形だった。紅斑、水疱、糜爛が皮膚や粘膜の大

部分の部位に広く現われることに加え、両目が今にも飛び出しそうなくらい開いていた。

男は絢輝たちを見ると、食事を中断し、何かを叫んだ。立花は吐き気に襲われたようで、顔を下げ、咳き込んだ。

「なんて言ってるんだ……」絢輝は啞然としながら聞いた。

「た、確か…罪深き者達に天罰を…って」

また男が叫んだ。

「今度はなんて？」

「神よ、私に食料をお与えになって感謝します」

絢輝は食料って何だと言う前に、男は叫びながら飛び降りてきた。見事に着地し、絢輝たちを睨み付けた。

「お、落ち着いてください。僕達は危害を加えませんか……」

日本語で言ってしまったため、当然相手には通じなかった。男は雄たけびを上げながら、走ってきた。

「逃げる！逃げる！」

絢輝は立花の右腕を引っ張りながら走った。だが、男は絢輝の数倍速かった。あつという間に追いつき、立花の左手を掴んで引っ張った。凄まじい力で引っ張ったため、絢輝は負けまいと本気で引っ張った。立花は両腕を凄まじい力で引っ張られ、苦痛の顔を見せた。

「……！千切れる……千切れる……！！！」

立花は苦しそうな声で言った。絢輝ははつとし、すぐに放し、男に駆け寄って右手で顔を殴りつけた。

男は立花を離し、怯んだ。すかさず絢輝は男の腹部に右足で蹴りつけた。

「早く！逃げる！」絢輝は倒れている立花に叫んだ。立花は立ち上がった。

「危ない！」

男は立花が叫ぶと同時に、絢輝を後ろから抱えこみ、ジャーマンスープレックスを繰り出した。

絢輝は背中を思いつきり地面に叩きつけられ、一瞬意識が薄れた。

人生で初めて食らったジャーマンスープレックスは絢輝に凄まじいダメージを与えた。

「た、立花…こいつはプロレスラーだ…逃げる…お前じゃ敵わない…！」

絢輝は咳き込みながら言った。男は絢輝の腹にニー・ドロップを食らわせた。

絢輝は完全にダウンした。意識はあるが、ダメージでしばらく立ち上がれない状態だ。

男は絢輝に興味が無いのか、立花に向かって走り出した。そして、リアットを繰り返した。立花は倒れこんだ。あお向けに倒れている立花の腹にニー・ドロップを食らわせ、絢輝と同じ状態にした。

「大の大人が…子供相手にプロレスするか…？」

絢輝は呟いた。何か無いかとポケットを探ると、膨らみがあった。

絢輝は期待しながら取り出した。彫刻刀だ。学校から配給された小型の彫刻刀だ。いつも護身用に持ってたな。絢輝は紙製の箱から一本の彫刻刀を取り出し、這いずりながら男のほうへと向かった。男は嫌らしい目で立花を見つめていた。

絢輝は男の右足首を掴むと、力を振り絞って、男の足首に彫刻刀を刺した。男は悲鳴を上げた。絢輝は辛うじて立ち上がり、男の右頬を思いつき殴った。男は膝をついた。絢輝は男の顔を何度か殴ると、

「とどめの一撃！」と怒鳴りながら男の喉を殴った。男は倒れこんだ。絢輝は立花を立たせ、肩を貸し、バスに向かった。男は倒れたままだ。

絢輝達がバスに着くと同時に、信二たちも着いた。

「信二か！」

「絢輝か！」

4人は近寄った。ソフィーは立花に肩を貸した。

「さつき化け物に襲われた！」

2人は同時に言い、同時に驚いた。

「お前もか…絃輝」

「まあな、とりあえずバスに乗ろう」

4人はバスに乗り、扉を閉めた。

遠くの岩場の上で、カウボーイの格好をした男が双眼鏡でバスを見張っていた。トランシーバーが受信した。

「俺だ」

「セガールか？悪い知らせだ。ジユドとナツコがやられた。死んではいないが、気絶してる」

セガールは不気味な笑顔を見せた。「知ってる。見てた」

『本当か？今度の獲物は手強いぞ』

「ジユドとナツコは無能だからな。それ以外の家族はそんなへまはしないさ」

『まあな。場合によってはあいつを解放するかもな』

「冗談か？」

『本気だ』

「そいつは面白い」

『じゃあ、また後で相棒』

「じゃーな。ステイブン」

無線が切れた。セガールは双眼鏡を下ろした。その顔は醜かった。

目が真っ赤に充血し、鼻は尖り、口は耳まで裂けていた。大柄で屈強な体つきをしたセガールは、ただ笑みを見せた。

## 会合

どこかのモーター。

モーター内の食堂に4人の人影が円形のテーブルを囲み、座っている。

「セガールの報告だと、連中は旅行用バス車内に閉じこもってるぞうだ」

男が言った。この男はゴーグルにマスクを着用し、自分の顔を隠している。

この男こそ、セガールの通信相手のステイブンだ。

「ジユドもナツコも本当に無能な連中だ」

保安官の格好をした男が言った。

ステイブンとは違い、自身の顔を露出している。

この男も醜かった。

唇がなくなつて、歯と歯茎を露出している。肌も荒れていた。

「ホホワイト、2人が可哀相だ」

ステイブンは哀れそうに言った。

「ホホワイトじゃない！ホホワイト保安官！」

「同じだろ？どちらにしろホホワイトは偽名だろ」

「昔の名前は捨てた。今はホホワイト保安官だ」

「よほほほ　よっほほ　」

3人目の男が機嫌良さそうに歌った。

この男の顔はゆがんでいた。名札にはキルユーと書かれている。

「お前らは何も分かってないな」

4人目の男が言った。

男は黒色のスーツにタキシードを着ていた。

肌は真っ白で、強膜が黒くなり、瞳孔が爬虫類のように細くなっていた。そして虹彩は赤く光っていた。口は裂け、常に笑みを見せられている。今までの異形者の中ではもっとも人間らしい。

ステイブンは首を傾げた。

「何が分かってないんですか？ビッグパパ」

「全てがだよ間抜け。それに、俺のことはくベルゼブブと呼べ」  
ベルゼブブは不気味な笑いをあげた。

食堂の扉が開く。

大柄の、血塗れのエプロンを着た、巨大な肉切り包丁を持った、  
鉄製の兜をつけた巨漢が入ってきた。

「肉屋、<sup>ブツチャー</sup>食事の準備が出来たのか？」

ステイブンは聞いた。

ブツチャーはうなずいた。

「よし、もってこい」

皿に乗せた車椅子を押しながら、将校用軍服を着た、肌がひび割  
れ、岩石色のした男が来た。

「シビル少佐、今日のメニユーは？」

シビルは口を開いた。

「人肉のステーキです。悪霊帝王様<sup>ヘルゼブブ</sup>」

焼きたてのステーキをテーブルに載せる。

「性別は？」

「女子です」

「焼き具合は？」

「ミディアムです」

ベルゼブブは満足した。

フォークとナイフを手に取り、一口サイズにステーキを切ると、  
味見した。

「うん、中々だ。うまい」

ブツチャーはうなずいた。

「さあ、食べ、息子達よ」

3人はステーキを食べ始めた。

「シビル少佐。2組はどうする？」

ベルゼブブはステーキを食べながら、聞いた。

「既にドラコとチャップが偵察に向かっています」

「後始末は？」

「ジユピターがやります」

ベルゼブブはますます満足した。

「奴は凶暴だが、<sup>ジユピター</sup>実力はナンバー2だな」

「そうですね」

ベルゼブブは立ち上がった。

「シャワーを浴びる。残りは食っていいぞ」

ブツチャーは残ったステーキを掴み上げ、兜を脱ぎ、異様に発達した犬歯だらけの口で食べた。

「1組の残りは？」

「男子3人女子3人は残りましたが、それ以外はトーマスが解体しました」

「解体した奴は？」

「保存室で保存してます」

「ハデスは？」

「寝てます」

ベルゼブブは目を光らした。

「家族に<あれ>は、ばれてないな？」

「はい」

「最重要危険人物は？」

「独房に閉じ込めてます」

「あいつは暴れだしたら、誰も止められないからな」

ベルゼブブは部屋を出ようとした。

「そういえば、ボスの好みそうな女の子が居たとか？」

ベルゼブブは振り向いた。

「どんな奴だ？」

「セガールの報告では、金髪のヨーロッパ人だそう。恐らくイタリアかフランス人かと」

ベルゼブブが振り向いた。

「フランスはボスの好きな国ですからね」

「その通り（プレシゼマン）」

満足げにうなずいた。

「プレシゼマン」

男

「この道を通るなんて、物好きな人ですな」

タクシー運転手は笑いながら言った。

「ここは人気の無い寂しい砂漠ですよ？」

黒木大輝は面倒くさそうに外を見ていた。

「英語がお上手で」

「英語だけじゃない。ドイツ語、フランス語、スペイン語、タガロ

グ語、若干訛りがあるがイタリア語も話せる」

運転手は驚いた素振りをした。

「へ〜天才ですな」

「ヨーロッパじゃ普通なんだろう？」

「ですな。私のような落ち潰れには天才に思えますが」

「俺もだ」

大輝はうなずいた。この長い時間の間、愉快的運転手のおかげで  
退屈しそうになさそうだ。

「知ってますか？」

「何が？」

「実は、この道では失踪者が相次いでいる」

「失踪者？」

「ええ。ここは核実験所だったんですよ。放射能はもうないって政  
府からの公式な見解がありましたし、前までは放射能による遺伝子  
変異を起こした生物が居るって噂があつたんですがね」

くだらない。核兵器の放射能は細胞を破壊するんだ。変異させる  
んじゃない。

「安心して下さいな。政府からは核実験による遺伝子影響はない  
って発表されましたから」

そうだな。白血病になつて死ぬだけだからな。

「まさかとは思いますが運転手さん、放射能で奇形児が生まれると

思っていましたか？」

「半分」

「日本は世界で唯一無二の核爆弾被爆国だ。日本では奇形児は生まれなかった」

「じゃあ、放射能で突然変異を起こした人間は？」

「ない。戦争で奇形児が生まれたのはベトナム戦争での枯葉剤被害者だ」

運転手はうなずいた。

大輝は不思議に思っていた。

なぜ、人は放射能でミュータントが生まれると思うのだろうか？水爆大怪獣ゴジラの影響か？

最初のゴジラは名作だな。続編は駄作続きだが……

「にしても、ここは殺風景な一本道ですな」

確かにそうだった。乾燥し果てた風景が広がっていた。

運転手のおかげで退屈はしてないが、本を持って来るべきだったな。

「なぜアメリカへ？」

「学校の修学旅行だが、俺は急用が出来たから生徒達の乗るバスを降りているいるあつて今に至った」

「大変ですな」

「YES」

その時だった。突然タクシーが傾いた。運転手は慌ててブレーキを掛けた。

「どうした！」

「分からない！今確認する！」

運転手は運転席から顔を出してタイヤを確認した。

「糞つたれ！タイヤがパンクした！」

「パンク？なぜ？」

「恐らく焼け付くような暑さが原因だ」

大輝は車から降りた。

「近くに建物が無いか調べてくる」

「じゃあ、私は無線で仲間に連絡を取ります」

そう言って運転手は無線で連絡を取り始めた。

「モーデーモーデーモーデー」

大輝は近くに建物が無いか探した。

遠くに古ぼけた建物が1つあった。

大輝は真っ直ぐ建物に向かった。

走っていったため、そんなに時間は掛からなかった。

建物は今にも崩れそうな外見をしていた。

建物の中心に入り口があり、入り口の前に汚らしい男が座っていた。

イチゴ牛乳のような瓶の飲み物を飲んでいた。

「すみません、車のタイヤがパンクしてしまいましたが、代わりの

タイヤはありますか？」

男は首を振った。

そう言えば、先生達に連絡を取って居なかったな。

「電話はありますか？」

「公衆電話が横に」

建物の横に錆付いた公衆電話があった。

電話を取ってみたが、壊れていた。

「他に電話は？」

「ないね、あれ一本だ」

大輝は舌打ちした。

まいった……これじゃ連絡が取れない。

「けどな、このまま道を真っ直ぐ進んだ先にモーターがあるはずだ」

「本当か？」

「ああ……そこで電話を借りな」

「助かった。ありがとう」

「どうって事ないぜ」

大輝はタクシーの場所まで戻った。

だが、運転手の姿が何処にも無い。

「すみません。運転手さん？」

返事すらない。

「どこいったのか……」

仕方なく大輝は手持ちのメモ帳でモーターで待っていると書き、運転席に置いた。

「歩くか」

一体どれくらい時間がたったのだろうか。

モーターが見えてきた。

「やったぞ」

大輝は走ってモーターに入った。

カウンターには誰も居なかった。

「誰か居ませんか？」

返事すらないのが不気味だ。

大輝はカウンターのベルを鳴らした。

誰も来ない。

「留守か？店を開けたまま？」

仕方なくカウンターを乗り越え、管理室に入った。

管理室の壁に鍵の束が置かれ、中心にテーブルとソファがあった。

「電話：電話：電話：あった」

黒い電話があった。

大輝は受話器を取って番号を押した。

この旅行の責任者である校長に電話を掛けた。

だが、出なかった。

仕方なく、1組の担任に掛けた。

出なかった。

3組の担任。

出なかった。

4組の担任。

出なかった。

5組。

出なかった。

「おかしいな…」

今回の旅行の医療担当で妻の百合に掛けた。

出なかった。

「どうしたんだ…一体？」

不意に、壁に貼られていた新聞記事が目に入った。

1つの記事によれば、ニューメキシコ州で核実験が数百回も行われたそうだ。住民は強制排除し、ここで実験を行った。

別の記事では失踪者のことが書かれていた。数十人も失踪者が出ているそうだ。

「長居は無用だな」

そう言っつて管理室を出た。

だが、モーターの出入り口に誰かが倒れていた。

「大丈夫ですか」

そう言いながら駆け寄った。

だが、それは死体だった。

1組担任の男性教師、中村大助だった。

「中村先生！」

中村は首を切られていた。

「糞！殺人か！」

中村は何かを持っていた。

回転式拳銃だった。

コルト・パイソン4インチ・モデル。いわゆるマグナムだ。

「先生がなぜこれを…？」

言ってる暇は無い。とりあえず拳銃を持って管理室の電話で警察に連絡しようとした。

だが、さっきまであった電話が消えていた。

「どこだ！確かにここにあったはずだ！」

また新聞記事を見た。

大家族失踪。核実験の被爆可能性アリ。

「まさか：な」

その時、管理室の窓を破って何かが入ってきた。

大輝はその顔に見覚えがあった。

タクシー運転手だ。

胸の中心に大きな槍を刺されて死んでいた。

「畜生：何があっただんだ？」

大輝は拳銃を構えた。撃つたことは無いが、イメージでは撃てる。管理室の隅にロッカーが置かれていた。

「何か無いか？」

そう言つてロッカーを開けた。

何も無かった。

厳密には散弾銃の弾だけが転がっていた。

「弾だけか！散弾銃は無いのか！」

その時銃声が鳴り響いた。テーブルが木っ端微塵に破壊された。

大輝は管理室を出て、管理室のドアを閉めた。

「糞！誰を撃つてやがる！冴えない地味な教師だぞ！」

銃声が鳴り響く。

「俺は日本人だ！アジア人だ！かつては第二次世界大戦に敗れた敗戦者の末裔だ！」

再び銃声が鳴り響く。

モーターの出入り口が開いた。

男は古い炭鉱夫の作業服を着て革のガスマスクを着けている。手には棘のついた鉄管を持っていた。

「まさかとは思つが、俺を殴る気か？」

男の胸元に名札が着いていた。コリンと書かれていた。

「コリンさん落ち着いて。俺は銃を持っている。OK？」

コリンは無言鉄管を構えて走ってきた。

大輝は横にとんだ。

鉄管はドアにぶつかった。

大輝は倒れたまま拳銃を構えた。

「動くな！撃つぞ！」

コリンは無言で近寄ってきた。

大輝は1発撃った。好ましい反動と共に銃弾は男の腹に炸裂した。

だが、男は難なく武器を構えた。

「嘘だろ……」

コリンは振り下ろしてきた。

鉄管は男の大事な急所をかすって地面にはじかれた。

大輝はもう1発撃った。

弾丸は右肩に炸裂した。

コリンは倒れこんだ。

大輝は立ち上がり、拳銃を向けた。

右足で鉄管を遠くへ蹴った。

「さあ、俺の勝ちだぞ」

コリンは一言もしゃべらず、ただ大輝を見ていた。

「さあコリン、次はどうする？」

コリンは突然トランシーバーを口元に寄せた。

「ダグラス！」

再びモーターの入り口が開いた。

今度は大柄の男が入ってきた。

大輝は男の顔を見て絶句した。

男の顔は左半分が歪んでいた。

この男もまた、炭鉱夫の作業服を着ていた。

手には散弾銃のイカサM37を持っていた。

「まずい！」

大輝は伏せた。

散弾銃が火を噴き、散開した弾丸は木造の管理室のドアのあちこちを穴だらけにした。

大輝は拳銃を2発撃った。

弾丸はダグラスの右腿と左肩に炸裂した。

だがダグラスは痛がる素振りを見せずに散弾銃を構えた。

大輝は走った。走りながら拳銃を2発撃った。

1発目は外れたが、2発目は腹部に命中した。

だが散弾銃を撃ってきた。散開した弾丸は大輝に当たらなかつた。

大輝は撃とうとしたが、カチツと弾切れを知らせる不愉快な音がした。

大輝は悪態つきながら拳銃を捨て、窓を破ってモーターを出た。

再び銃声が聞こえたが、弾丸はどこにも命中することなく消えた。

大輝は近くの自動車に乗り込んだ。

銃声が鳴り、自動車のドアは穴だらけになった。

大輝は自動車に鍵が無いと知ると、降りた。

が、ダグラスは目の前にいた。

「死ね」

ダグラスははき捨てた。

無駄だと思っただが、大輝は両手を挙げ降参を示した。

ダグラスは散弾銃を構えた。

「覚悟は出来たけど、一言いいか？」

「なんだ？」

「葉巻は煙草と違って吸わないんだ」

大輝はダグラスのポケットに葉巻があることに気づいて、あえて指摘した。

「覚えとくよ。ありがとな」

ダグラスは笑みを見せながら引き金を引いた。

カチツ

散弾銃は弾切れだった。

大輝は散弾銃の銃身を右手で掴み、持ち上げ、左手でダグラスの歪んだ顔を殴った。

ダグラスは散弾銃を放した。

大輝は散弾銃でダグラスの腹部を殴りつけた。

ダグラスは咳き込んだ。

大輝は銃底ストックでダグラスの男の大事な大事な急所を思いっきり殴った。

ダグラスは叫ばず、よだれを垂らしながら、倒れた。

大輝はモーテルに戻り、管理室に向かった。

管理室の前には相変わらずコリンが倒れていた。

「そっだ……ダグラスは今頃殺してる」

「あいつが失敗するわけが無いからな」

「残念ながら現実は厳しい」

コリンは大輝を見た。

「ダグラスがやられた！」

「厳密には男の大事な金玉を潰した」

大輝はコリンからトランシーバーを奪い取った。

「おい！お前は何者だ！」

返事が無い。

「何が望みだ！」

「返事しろ！」

「教え子は可愛いか？」

「何？」

「教え子の命は俺達が握っている」

「何をした！答える！どういう意味だ！」

返事は無い。雑音しか聞こえない。周波数を変えたらしい。

大輝は管理室に入り、ロッカーから散弾銃の弾丸を取り出し、散弾銃に込めた。

最大5発は入った。

予備の弾丸を右ポケットに詰めるだけ詰めた。

よく見ると、他の弾丸が入った箱がある。

357マグナム弾と書かれている。

「さっきのリボルバーの弾丸か？」

箱から弾丸を取り出し、左ポケットに突っ込んだ。

そして管理室を出て、拳銃を拾った。

空薬莢を排出し、装填した。

拳銃をベルトに挟み、散弾銃を肩に掛けた。

「さて、ここからどうするべきか……」

## 保安官

信二は迷っていた。

このままバスに待機していたら、一体いつ救助が来るのだろうか？  
もしかしたら救助どころか、誰も来ないかもしれないな。

「ちょっとモータールに行ってくる」

信二は思い切って委員長長の立花に行った。

「モータール？」

「そう、しばらく歩いた先にモータールがあったはずだ。そこで電話を借りるさ」

ソフィーは顔を下げた。

「モータール……」

「どうかしたか？」

「ううん。なんでもない」

モータールで2回も人が死ぬのを間近で見たのだ。戻りたくない場所だ。

「別にお前が来る必要は無い。俺だけで十分だ」

紘輝は首を鳴らしながら言った。

「でも人数が多いほどこっちが有利だぜ」

「確かに……でも……」

「それに、今起きてるのは俺にお前、立花にヴェルネに今目を覚ましたばかりの坂本に安藤に佐々木だけだ」

真希に真人に奈々子は目を覚ましたばかりで、頭があまり働いていない。

「どうする？1人で行くか？化け物が何人いるかわからないこの糞熱い場所です？」

信二は迷った。

友人達を危険な目に遭わせたくは無い。だが1人で行動するのも危険だ。

慎重に判断せねばならない。

化け物が何人いるか分からない砂漠で1人で行動するか？大勢で行動するか？

道は2つに1つ。

「じゃあ、皆で行くか？」

「よし来た！」

「私はいつでも一緒に行くわ」

「私も」

真人が寄ってきた。

「状況は大体分かった。俺達も行くぜ」

信二は首を振った。

「無理はしないで」

「俺と佐々木は部活入りで真希は空手を習ってる。頼もしい護衛にはなるはずだぜ」

確かに頼もしい。陸上部で鍛えられた脚力に剣道部の実力者に黒帯…少しは戦力になるな。

危険な目には遭わせたくないが本人たちが行きたいというのであれば、行かせても構わないかな。

「じゃあ、行こうか」

信二はバスの扉を開けた。

外は魂が腐りそうなくらいに暑かった。まるで熱帯地獄だ。

「ちよつと待て」

奈々子はバスの大荷物を入れる場所の扉を開け、自分の荷物を取り出した。

「確か…ここに…あった！」

竹刀を取り出した。

「素手よりはました」

真人は肩を竦めた。

「竹刀が武器になるか？」

奈々子は竹刀の竹部分を取り外した。

中から銀色に輝く刃が現れた。真人は顔を青くした。

「真剣か？」

「ああ、これでも武器にはならないか？」

「いや十分です。すいません」

奈々子は日本刀を鞘に収めた。頼もしい剣道部員だこと。信二はそううなずいた。

7人はモーテルに向かった。

セガールは双眼鏡で7人は見張っていた。

「ステイブン、7人がモーテルに向かった。殺るか？」

「いや、パトカーがモーテルに向かって走ってる。今行動するとま  
ずい」

「パトカー？こんな砂漠に？」

「ベルゼブブの情報だ。信憑性は高い」

「ボスの情報網は広大だから」

「今は行動するな。すでにカメレオンとアンナを始末に向かわせた」

「2人はプロだから」

「ああ、確実に始末してくれる」

セガールは満げにうなずいた。

これで安心してバスを見張れる。

さあ行くがいい7人の生徒よ。お前らは警察と共に殺される運命だ。

信二と紘輝は先頭に立って歩いていた。

「知ってるか信二？」

「何だ紘輝？」

「つり橋の上で告白すると成功率が通常の数倍跳ね上がるそうだ」

「なぜ？」

「つり橋に居るときの緊張感を恋と間違えるそうだ」

世の中そういうものさ。

この世の中で信頼できる愛なんて本当の意味で存在しないのかもしれない。世の中理不尽な事が多いこともある。

そう考えているといつの間にかモーテルに着いた。

「じゃあ、中で電話を探してくる」

信二は中に入った。ソフィーと一緒に。

信二は英語が完璧だ。それに比べソフィーは完璧すぎるほど英語が出来る。電話はソフィーにさせるつもりだ。

「ここは無人のはずだよ」

「本当に？」

「多分：だけど」

信二はカウンターを見た。電話は無かった。

仕方なくカウンターを乗り越えて管理室に入った。

管理室では窓が割れて、テーブルが砕かれていた。

「こんなに荒らされていたか？」

「ううん。もつと綺麗だったよ。きつと何か争った跡だよ」

何か？つまり俺達以外に普通の人が居るのか？

信二は管理室を見渡した。

電話は無かった。

ため息つきながら管理室の机の大きな引き出しを開けると、携帯

電話があった。

「ソフィー、警察と連絡できるか？」

「やってみるよ」

ソフィーは番号を打った。

「駄目みたい。圏外だよ」

圏外：嫌いな言葉だ。

固定電話が無いか探した。

だが、影も形も無かった。

「仕方ない、圏内に入れる場所を探そう」

「うん、そうしよう」

信二は管理室を出た。

モーターを出ようとしたとき、何かを感じたか外を見た。外では相変わらず5人が待つていた。

紘輝と真希が中に入ってきた。

「遅いぞ、電話はあつたか？」

「あつたが圏外だ」

その時、バイクのエンジン音が聞こえた。

信二は身を潜めた。

外に人物達を中に入れさせようとしたが、遅かった。

オートバイに乗った20代前半くらいの金髪女性がサングラスを掛けながら来た。

「アジア人がなぜここに？」

そう呟いた。

オートバイを降りたと思うと、突然コルト・パイソン6インチモデルを取り出し、3人に構えた。

外の3人は両手を上げた。

「あいつ！何を！」

紘輝は金属バッドを構えて外に出ようとした。

「待て！今出ても撃たれるのがオチだ！」

真希は信二を見た。

「見捨てるの？」

「違う、隙を見つけて助ける」

信二は管理室に向かい、何か武器になるものが無いか探した。

机の引き出しにワルサーPPKがあつた。007でジェームズ・ボンドが愛用していたドイツ製の拳銃だ。名前は知らなくても、小型で遊底スライトが短く、トリガーガードから銃口かけてカーブを描くシルエットに見覚えのある人が多いだろう。ヒトラーの愛銃でもあつた。信二は弾倉を取り出し、弾が入っていることに満足すると、装填した。

信二は急いで入り口に向かった。

「状況は？」

「3人とも並ばされた」

信二は外を見た。

外では女が3人に拳銃を構えながら喋った。

「何か金目のものはあるかい？」

「……ない!」「……」

3人は同時に堂々と大きな声で言った。まるで拳銃を恐れていないような。

「黙らっしやい!」

女は拳銃を立花の顔に近づけた。

「あなたの可愛いこの顔に穴が開いていいの?」

「あの野郎!」

絃輝は出てこようとした。

信二は絃輝の腕を引っ張った。

「よせ、危ない」

「このままじゃ危ない!」

「あれを見る」

遠くから赤と青に光が見えた。

「パトカーか?」

「恐らく」

外では女が立花に拳銃を向けていた。

「いいのかしら?顔が台無しになるわよ」

立花は若干日本語訛りの英語で言った。

「あなたは臆病者。拳銃さえあれば他者を支配できると思ってる小物の女よ」

「うるさい!」

女は立花に平手打ちした。

「あの女!ぶっ殺してやる!」

絃輝はバッドに力を込めた。

「抑えろ、抑えるんだ。あの女が引き金を引きそうになったら、俺が撃ち殺す」

信二は遊底スライドを引いて装填した。

「撃てるか？」

「至近距離なら当たる」

奈々子は刀を抜こうとした。

だが、突然近くからパトカーのサイレン音がした。

女は振り返った。

「ちっ警察か！お前ら黙ってるよ。死人が増えることになる」

女は拳銃を背中に隠しながらパトカーから人が降りるのを待った。

パトカーの助手席から制服を着た40代後半から50代前半の警

察が降りてきた。

「どうかしましたか？」

警察は愛想の良い声と口調で言った。

「助かりましたよ！トラブルがあります」

女は引き金に指を掛けた。

「奇遇ですな！こちらもトラブルがありました！」

「トラブル？」

運転席からもう1人の警察官が降りた。

突然銃声が鳴り響いた。

気づけば女の体は空中を舞っていた。

腹部に大きな穴が開き、血と肉片を撒き散らしながら倒れた。

「畜生！……何が……あった！」

女は血を吐いた。

助手席の警察官が散弾銃レミントンM870で女を撃つたのだ。

運転席の警察官が叫んだ。

「ケネス！なんて事を！」

3人は運転席の警察官を見た。

3人は絶句した。

運転席の警察官は奇形な顔をしていた。左目は大きく開き、上唇は「く」の字のようにつりあがり歯と歯茎を露出していた。

胸には名札があり、カート保安官補佐と書かれていた。

女は撃った男にも名札があり、ケネス保安官と書かれていた。

「カート、いちいち俺のやり方に反論しないでくれ」

「人殺しは良くない！」

「この女は暴走族の一員だ。つまりこの世のゴミだ。ゴミは始末するのが通さ」

「人はゴミじゃない！」

「人にもこの世に必要な得の高い奴と必要ないゴミとが別れてる」

ケネスは白髪フオアエンドの髪を掻き分けた。

ケネスは散弾銃の先台フオアエンドを動かし空薬莖の排出と次弾の装填を行った。

「この女はほつとけばのたれ死ぬさ」

ケネスは3人を見た。

「目撃者は消さないとな」

信二は瞬時にドアを開けた。

「皆速く入れ！」

3人はモータールに入った。信二は扉を閉めた。

同時に散弾銃の銃口から火が噴き、散弾が木製の扉のあちこちに穴を開けた。

信二は全員を管理室に入れた。

「窓から出るんだ！」

信二はタンスを倒し、管理室の扉を塞いだ。

絃輝は先に外に出て、外の安全を確認すると、立花から順に外に出させた。

「信二！お前も出る！」

信二は外に出た。

モータールの裏には何も無い。

乾いた砂漠のみだ。

「速く走って散弾銃が当たらない距離まで行こうぜ！」

真人は叫び声で提案した。

「良さそうで悪い提案だな」

奈々子は皮肉っぽい声で言った。

その時、モーテルの屋根から何かが飛び降りてきた。それは小柄だった。

だが、顔は醜かった。鼻はつぶれ、唇は異様に大きい。ニキビの様なできものが顔中にある。

「あたしはアンナ！お前は！」

幼い声でそう言って立花に飛び掛った。

「危ない！」

紘輝は金属バットでアンナを殴りつけた。腹部を殴られたアンナは倒れた。

「うっ！殴ったな！糞野郎！」

アンナは立ち上がり、紘輝の両肩を掴んだ。そして持ち上げた。

「力あるね」

「おりゃ！」

紘輝を投げた。紘輝は2m飛んで落ちた。

真人は右足でアンナの股間を殴った。

「あたしにそんな蹴り効くとも？」

「女なのか！？」

アンナは両腿で真人の顔を挟んだ。同時に自身の体をくねらせた。真人は一回転し、地面に叩きつけられた。

信二は拳銃を構えた。

「動くな！撃つぞ！」

アンナは止まった。

が、笑みを見せた。

「何がおかしい！」

「信二君危ない！」

ソフィーが信二を横から押した。

信二が居た場所に斧が振り落とされた。

大柄の男が立っていた。左の顔が歪んでいた。ダグラスと呼ばれた男だ。

ダグラスは信二の右足首を掴むと、投げ飛ばした。

信二はモーテルの壁に叩きつけられた。

ダグラスはソフィーを抱え込んだ。

「いや！やめて！放して！」

「ダグラス、ヨーロッパ系の女はボスが欲しがっていた。傷つけるなよ？」

ダグラスは興奮気味な声で笑った。

だが、突然立花を落とした。

真希がダグラスの股間を右手で殴っていた。

ダグラスは股間を抱え込んで倒れた。

「ダグラス！」

アンナは真希に殴りかかった。

真希は中段受けで攻撃を防いだ。

右手で顔を殴った。

「あいて！」

左手で胸を殴った。

両手で頭を掴むと、頭を下ろし、右膝で顔面を蹴った。

アンナはよろめきながら言った。

「ダグラス！こいつは強敵だ！」

ダグラスは真希に突進した。

真希は裏拳を繰り出した。拳は左顔面に直撃した。休む間も与えず、横蹴りを繰り出した。

蹴りは顔面に直撃した。

ダグラスは倒れこんだ。

「ニック！」

アンナが叫ぶと同時に奇声を発しながら、日本中学生平均身長くらいの包帯を巻いた少年がつるはしを振り回しながら走ってきた。

「まずい！真希は心の中で叫んだ。」

気づけばつるはしは間の前まで迫っていた。

だが、ニックの左腿に何かが貫通した。

刀だ。

奈々子は刀を抜き、ニツクの腿に刺したのだ。

奈々子は刀を抜いた。

ニツクは倒れこんだ。

「もう立てないだろ？」

奈々子は刀を構えながら言った。

だが、ニツクは難なく立ち上がった。

「しぶといな」

ニツクはつるはしを構え、奈々子に振り下ろした。

奈々子は刀で受け止め、左足で腹部を蹴った。

ニツクと奈々子はつるはしと刀で斬りあい始めた。

真希はその様子を見守った。だが、アンナが後ろから羽交い締めをした。

真希は身体を決めて頭に反動をつけて、相手の顔面に後頭部を叩きつけた。本来なら鼻が折れるだろうが、アンナには折れる鼻が無かった。

真希は振り返り、組み手構えをした。アンナは右手でストレートを繰り出したが、相手のパンチを半身でかわし、ステップインして相手の後頭部を押し下げて、ひじ打ちを上方から打ち込んだ。そして第2関節部を相手の鼻のあるべき場所を狙って殴った。

アンナは倒れこんだ。

「糞……ダグラス!!」

ダグラスは立ち上がった。だがソフィーがスイカ程の大きさの石で後頭部を殴りつけた。

ダグラスは倒れた。

だが右横に転がり、斧を拾った。

「やばっ！」

ダグラスは雄たけびを上げながら斧を構えた。

「武器を捨てろ！」

信二は拳銃を構えながら叫んだ。

ダグラスは信二を見ながら走ってきた。

「止まれ！」

ダグラスは止まらなかった。

糞！

信二は心で悪態つきながら、拳銃を2発撃った。

弾丸は右肩と左腿に炸裂した。だがダグラスは難なく走ってきた。

「嘘だろ！」

ダグラスは斧を振り回した。信二は膝を曲げ、かわした。

ダグラスは袖を掴み、投げ飛ばした。壁に叩きつけられる。

「痛っ…！」

ダグラスは信二を持ち上げた。だが紘輝が後ろからバットで股間を殴った。

ダグラスは抱え込みながら膝を着いた。

紘輝はダグラスの頭をバットで殴った。

ダグラスは倒れた。

奈々子とニツクは斬りあいを続けた。

立花はニツクの背後に周り、男の急所を蹴り上げた。

ニツクは苦しげな奇声を発しながら倒れた。

だが2人は気づかなかった。

岩石に似た皮膚を持つ男、カメレオンが地面に伏せながら吹き矢を構えた。

吹き矢はピシッと小さな音を立て、奈々子の首に命中した。毒はたちまち回り、奈々子は全身の力が抜けた。カメレオンは矢を装填し、立花に狙った。また小さな音が鳴り、立花の首に当たった。立花は意識を失った。奈々子は朦朧とする意識の中、立ち上がるように杖のように地面についた。だが、ニツクは奈々子を殴りつけた。奈々子は気を失った。

アンナは立ち上がり、真希と対面した。

「あんだほごしぶとい獲物は初めてだよ」

「どうも、ありがたい言葉を」

アンナはベルトに挟んでいた小型のつるはしを構えた。

「これで終わりだ」

真希は構えた。

「死ね！」

アンナはつるはしを投げようとした。

その時だった。

銃声が鳴った。

アンナの頭部は瞬時にして肉片と脳みそを撒き散らしながら砕け散った。

「アンナ……！」

ダグラスはほとんど遠吠えに近い声で叫んだ。

「乱闘はいけないな」

ケネスが散弾銃を構えながら言った。

信二たちはモータールに飛び込んだ。

ダグラスは倒れている立花をお姫様抱っこすると、ニツクと共にどこかに向かって走った。

カメレオンは動かさず、岩に擬態しながらケネスが去るのを待った。

ケネスは倒れてる奈々子に近づいた。

「これはこれは……すぐに治療せんとな」

ケネスは奈々子を左肩に担ぐと、散弾銃をモータールに向けながらパトカーに向かった。

「立花！」

紘輝は外に出ようとした。

「よせ！」

信二は紘輝を止めた。

「んで止める！」

「今出たら撃たれる！」

「だが立花と佐々木が連れて行かれるぞ！」

信二は拳銃でケネスを撃とうと立ち上がった。

そして、引き金を引いた。

かちっ！

拳銃は弾詰まりを起こした。

「まづい！」

ケネスは散弾銃を撃った。

信二はしゃがんだ。スライドを引いて不良弾薬を排出した。立ち上がったときには既にケネスは正面のパトカーに居た。

信二はモーテルの入り口に向かい、外に出ると同時に拳銃を構えた。

だが、パトカーは出発していた。

ケネスは助手席から顔を出して叫んだ。

「また戻るよ！安心しろ！お嬢さんは丁重にもてなすよ！」

信二は拳銃を撃った。

ケネスは慌てて顔を引つ込めた。

信二は猛スピードで走り去るパトカーを見守った。

「待ってる、必ず助けるからな2人とも」

## 保安官（後書き）

### 【追加登場人物】

#### 『異常者』

アンナ・・・異常者の1人。ケネスに射殺される。  
ダグラス・・・異常者の1人。立花を連れ去る。  
ニック・・・異常者の1人。つるはしで襲ってくる。  
カメレオン・・・異常者の1人。岩に擬態する。  
コリン・・・異常者の1人。行方不明。  
ステイブン・・・異常者の1人。セガールと無線でやり取りする。  
セガール・・・異常者の1人。双眼鏡で見張りをする。  
ホワイト・・・異常者の1人。保安官気取り。  
キルユー・・・異常者の1人。能天気。  
シビル・・・異常者の1人。階級は少佐。  
ブッチャー・・・異常者の1人。料理人。  
ジユド・・・異常者の1人。  
ナツコ・・・異常者の1人。  
ベルゼブブ・・・異常者の1人。ボス。

#### 『人間』

ケネス・・・保安官。極悪人。  
カート・・・保安官補佐。異形な顔をしているが善人。  
モータールの管理人・・・自殺した。  
ソフィーと出会った男・・・どこかの男。矢で射殺される。  
大輝と出会った男・・・汚らしい。  
タクシー運転手・・・殺された。

## 保安官本部

奈々子は目を覚ました。

そこはパトカーの後部座席だった。

奈々子は運転席の後ろに座りなおした。

日本の運転席とは逆だった。

「目が覚めたかね？お嬢さん？」

ケネスがバックミラーで奈々子を見て聞いた。

奈々子は腕を背中に捻り上げられていて、後ろ手に手錠を掛けられていた。

「なぜ手錠を掛けるの？」

日本語訛りの英語で聞いた。

「な〜に、あんたにちよつち暴行罪がある」

暴行罪？この男は頭が狂っているの？

道の途中で用を足してる男が居た。

ケネスは車のマイクを掴んだ。

「その男、とまってる」

車のスピーカーを通じて語りかけた。

ケネスは車から降りると、男の腕を捻って手錠を掛け、後部座席に乗せた。

「何があつたんですか？」

奈々子は聞いた。

「野外でのおしっこは犯罪だそうだ」

男は怒りをあらわにした目でケネスを睨んだ。

ケネスは車に乗ると、車の無線機を取って連絡を取った。

「ケネスから本部へ、どうぞ」

「こちら本部」

無線から男の声が返ってきた。

「男女2名を逮捕。男性は車を所持、回収に来て欲しい」

『了解、レツカー車を送る。署まで連行しろ』

「了解」

無線機を戻した。

「お前達は警察に行くことになる。カート、発進しろ」

車は発進した。

「なぐに、安心しろ。留置所には行かない。ちょっとしたら開放する」

奈々子は今日の記憶が思い出せなかった。

「お嬢さんはなぜここに？」

「学校の旅行で着ました」

「そうか、旅行か…旅行はいい、仲間との関係も深まるし、家族と違って思いつきりふざけあえる」

ケネスは笑った。

「知ってるか？妻が子連れでこんなところまに来て居るときは、十中八九は夫に腹を立ててるんだよ」

奈々子はなぜ突然そんなことを言うか理解できなかった。

「ほら、あそこだ」

ワゴン車が止まっていた。カートはブレーキを掛けた。

ケネスは降りた。

「奥さん、ここでの駐車は違反ですよ」

運転席から若い女性が出てきた。

「すみません、タイヤがパンクして代わりが無いから…」

「言い訳はいいから警察まで来てもらうよ。なぐに、ちょっと書類などを書くだけだからさ。お子さんも一緒にね」

女性は車の中の子供を連れ出し、パトカーの後部座席に向かった。

ケネスは助手席に乗った。

「ほら、つめてつめて！」

2人はつめた。

「ごめんささい」

女性は後部座席に乗ると、子供を膝の上に乗せた。4歳から5歳

くらいの女の子だ。

「ケネスより本部へ、どうぞ」

『こちら本部』

「もう一台運んで欲しい車がある。ワゴン車だ」  
『了解』

ケネスは無線機を戻した。

レッカー車がパトカーを通り過ぎた。

『ケネス、また駐車違反者が居たのか？』

「ボブ、ワゴン車はパンクしてるそうだ」

『ははは！パンクは良くあることだ！』

「まずはこの先にある車から運んでくれ。ワゴン車は後だ」  
『アイアイサー』

「ボブ、ここは軍隊じゃないんだ。返事は了解だ」

『アイアイサーキャプテン、了解』

レッカー車が男の車を回収しに向かった。

「まず、全員の名前を聞こう。お嬢さんから順番にな」

「佐々木奈々子、佐々木が苗字で奈々子が名前だ」

「ジェーン・ハーベルト」

「ローズ・ペグ。娘はミラー」

ジェーンはオールバックの髪の毛を掻き毟った。

「ナナコにジェーンにローズにミラーっと、よし出発」

カートはアクセルを踏んだ。

「にしてもローズ、なぜここに？」

「目的地の近道って聞いたから」

「誰に？」

「どこかの男に」

ケネスはうなずいた。

「大変ですな。私が町一番のステーキの店に案内します。あそこの  
Tポーンは絶品ですな」

この男はおしゃべりなのか、黙った姿を見ていないな。

「この場所では何があつたんですか？」

奈々子はなるべく愛想に良い声で言った。

ケネスは薄笑いを浮かべた。

「この場所では核実験が行われた。それにどこかの町の地下で、今でも石炭が燃えているんだ。そう、ここはまさしく地獄だ」

ケネスは暗い顔で前を見ていた。

「皆良い人だったよ。いや、まあ、ほとんどがな。中には気の毒な人も居る。放射能を被爆し、世間から嫌われた連中がな」

それまで喋っていたケネスが黙り込んだ。過去の何かをじっと見つめながら。

乾燥した岩場の上で、セガールがトランシーバーから朗報が流れるのを待っていた。

『セガールか？』

『ステイプ、やったか？』

『アンナが殺された』

セガールは殴られたような驚愕な顔をした。

が、それは一瞬だけで、すぐに笑みを浮かべた。

「あの馬鹿女。あれだけあっさり殺せと言ったのに」

『アンナを殺したのは保安官だ』

『どうやら保安官を見くびっていたな』

『だが、ガキを1人捕まえた。綺麗な銀髪の女だ』

『まさか…やるのか？』

『ああ、やるつもりだ』

『誰の？』

『投票で』

セガールは笑みを浮かべた。同時に悲しみの顔も見せた。

「アンナが殺されるなんてな……」

パトカーが走っていると、巨大な洋館のような建物が見えてきた。

正面には入り口があつたが、普通のドアだった。

「ケネスより本部へ、どうぞ」

「本部よりケネスへ、どうぞ」

「ただいま本部に到着しました」

「人ではいるか？」

「くれるか？」

「1人送る」

パトカーは洋館の正面に止まった。ケネスはパトカーを降りた。

「カート、見張つてろ」

そう言つて洋館に入った。

カートはパトカーから降りると、ホルスターから自動拳銃ベレッタM92Fを抜き、4人が乗つて後部座席に向けた。

「逃げないでくれ。殺したくない」

イタリア製のクールな拳銃を向けながら、カートは言った。

奈々子は今日の出来事が思い出せなかつた。

厳密にはなぜパトカーに乗せられ、手錠を掛けられているのか理解できなかつた。

私は警察に捕まるような事をしたか？

洋館から誰かが出てきた。少し太った巨漢だった。

顔にはボロボロの麻袋を被り、腰からはエプロンを纏っていた。

巨漢はパトカーのトランクから何かを出した。

抱え込んで居たのは女だった。

腹部に銃弾を食らつて重傷だが、辛うじて生きていた。

そつだ！全てを思い出した！

ケネスが家から出てきた。

「トム！その女はいつも通りあれをやれ！」

太った巨漢　すなわちトムは、女を肩に担ぐと、家に入つていった。

ケネスは散弾銃を構えながらパトカーに後部座席の近づいた。

「全員車から降りろ！」

全員言われるがままにパトカーを降りた。

「これから本部に入ってもらおう。1人1人尋問する」  
そう言って誰にするか決めているのか、目で全員を見ていた。

「ミラーちゃんは祖母のノーマに遊んでもらってね。カート！女の子をノーマおばちゃん場所に連れて行け！」

カートは拳銃をホルスターに仕舞った。

「さあおいで」

カートはミラーの左手を掴んでゆっくり引っ張った。

「誰から始める！」

3人は迫力のある怒鳴り声で一瞬痙攣を起こした。

ケネスは3人を睨んだ。

「よし……お嬢さんから始めよう……」

ケネスは首を「こい！」とばかりに振った。

奈々子はケネスについて行った。

家からまた誰かが出てきた。

それは先のトムとは別の巨漢だった。

レザーコートを着て、右手に鉈、顔には包帯を巻いていた。

「ジャクソン、こいつらを見張るんだ。いいな？」

ジャクソンはうなずいた。

ケネスは奈々子を連れて家に入った。

玄関に入ると、右側に2階と繋ぐ階段があった。

左側の奥には鉄製の引き戸があった。

「どこに連れて行く……気ですか？」

「なぐに、ちよつとした尋問室だ」

ケネスは鉄製の引き戸を開けた。

中は3つの鉄製フックがぶら下がり、部屋の左隅には冷蔵庫のよ  
うなものが倒れていた。

部屋はさながら肉屋のようだ。

右側の奥にはまた鉄製の引き戸があった。

だが、ケネスは部屋の中心にあるテーブルをどかせ、鉄製の1メ

「トムほどの正四角形の鉄板を持ち上げ、梯子を下ろした。

「中に入れ」

奈々子は言われるがままに梯子を下がった。

中は廃棄された工場のように汚らしかった。

部屋の中心には井戸があった。

「ここは？」

「尋問室だよ」

ケネスは梯子で下りながら言った。

「トム、閉める！」

トムは言われたとおり鉄板で入り口を塞いだ。

ケネスは突然散弾銃のストックで奈々子の後頭部を殴りつけた。

奈々子は意識が朦朧とし、倒れこんだ。

ケネスは奈々子の両手首を鎖で縛り上げ、南京錠を掛けて吊り上げた。

奈々子は鎖に吊り上げられ、空中にぶら下がった。

「うん、君は尻まである髪の毛をポニーテールで纏めているね？ 私好みだよ」

奈々子の意識は朦朧としているので、何を言ってるか聞き取れなかった。

「顔もアジア人とは思えないくらい可愛い。日本人はアジアの中でも美人が多いね」

そう言っつて奈々子の髪の毛の匂いを嗅いだ。

「いい匂いだ、うん、君のことが大好きだ。後でゆっくり尋問しよう」

ケネスは奈々子を気絶させるか迷った。

手のひらを女のシャツの下に這わせる。ブラ越しに完璧な胸が感じられた。いいぞ。

ケネスはにやっとした。お前は中学生にしては十分過ぎる女だ。

俺を興奮させる動物的本能、完璧な胸、美形、ツインテール。

ケネスは慎重な道を選んだ。こちらが他の奴を尋問している間は

気を失ってもらおう。

縛ってるから逃げることは無いが、自分が仕事をしている間にもがいて疲れきつたらつまらない。その強さを残しといてくれ……俺のために。

奈々子の頭をわずかに起こし、手のひらを首筋にあてがって頭蓋骨の真下にあるくぼみを探した。このつぼは、これまで数え切れないほど使った。砕かんばかりの力を込めて親指を圧迫し、軟骨がめりこむのを感じた。奈々子は即座にぐったりした。20分だ。

ケネスは自分の興奮を抑えながら、叫んだ。

「トム！開けてくれ！」

鉄板が開く。

ケネスは梯子をあがった。

「あの女はどうした？」

トムは指差した。

一番右端の豚をつるすフックに女をつるしていた。

「よし、よくやったトム……と言いたいが、弾丸が体に入ったままじゃ危ないな。全部抜くんだ。いいな？全部だぞ」

トムはうなずくと、女をフックから外し、テーブルに載せた。

「楽にしてやれ」

ケネスは冷たく言い放つ。

トムは肉切り包丁を持った。

一瞬だった。

トムは手際よく女の喉を切った。

女の喉から血が噴出し始めた。

「よし、弾を抜け」

トムは大きなピンを取った。

傷口にピンを入れると、弾を抜き始めた。

ケネスは家の外に出た。

外ではジャクソンがローズとジーンを見張っていた。

「いいぞジャクソン！男のほうは納屋に連れて行け！女のほうは地

地下室に連れて行け！」

ジャクソンは2人の肩を掴んだ。

「畜生！放しやがれ！」

「やめて！」

ジャクソンは納屋に向かった。

納屋に着くと、男の両手を縄で縛り、つるし上げた。

「畜生！放しやがれ！」

ジャクソンは女を家に連れ込んだ。

階段の横にある鉄製の引き戸を開け、弾抜き作業をしているトムを通り過ぎ、部屋の右端にある鉄製の扉を開けた。

長い階段が下に続いていた。

ジャクソンはローズを連れ、階段を下がる。

ようやく地面にたどり着く。

そこは居間のように広がった。

だが、あちこちに水溜りがあった。

部屋の中心に縦長の鉄製の台があった。

右側の壁には、包丁、鉈、斧、鋏などの刃物がずらりと並んでいた。

その上に、大型のチェーンソーが貴重品のよう飾ってあった。

チェーンソーの刃に「日々を大切に」と書かれたラベルが貼られていた。

左側には謎の拷問器具が並べられていた。ここは拷問部屋だ。

ジャクソンはローズを台に乗せた。

そして、両手両足4つの首に台に繋がった手枷足枷を掛けられた。

「やめて！なぜこんなことするの！」

ジャクソンはローズの口にタオルを詰め込み、縛った。

うるさいわけではない。自殺出来ないようにだ。

ジャクソンはローズを置いて地下室を出た。

そして、鉄製の扉を閉める。



## 君は可愛いよ

気が付くと、立花は見知らぬ心地の良いベッドの上に居た。

ここは、どこか人気のない地下壕のような場所。下水道だろうか？上を見ると、明かりが立花を照らしている。

拘束されていなく、自由のみだった。

私の身に何があったのだろうか？

冷たい絶望感がたちまち全身を満たす。

目の前に、左半分が歪んでいる男、ダグラスが立花を見つめていた。

立花は思わず悲鳴を出してしまった。

「キミ、クアワイイネ」

ダグラスはほとんど正確に発音できていない英語で言っていた。

立花も英語は話せるが、ダグラスとは話したくなかった。

「オレノ、ミライノヨメ」

ダグラスはえへっえへへと笑いながら近寄ってきた。

立花は仰向けに寝ながら両手で後ろに下がった。

壁に当たってしまった。

ダグラスは立花を抱き上げた。

「エへへ！ワハハハ！」

立花はダグラスの頭を遠ざけようと両手で掴んだ。

「放して！お願い！」

英語で叫んだ。

「マ〜マ〜、ボクハ美人トケツコンスルヨ！」

立花はダグラスの左耳を噛んだ。

ダグラスは悲鳴を上げ、立花を放した。

ダグラスは遠吠えを上げながら立花の背中を片手で掴み、持ち上げ、地面に叩きつけた。もう一度持ち上げ、また叩きつけた。

「シネ！シネ！シネ！」

何回か叩きつけると、我に返った。

立花は立ち上がるうとした。

全身が酷く痛む。ちよつと動いただけでうめき声が漏れた。何とか肘について身体を起こす。

「ゴメンネ！ゴメンネ！ゴメンネ！」

ダグラスは土下座し、謝っていた。

一体何なんだろう？この人は？いい人なの？悪い人なの？

「ゴメンナサイ！」

少なくとも、機嫌を取ればいい人なのかも……しれない。

「い、いいのよ、大丈夫だから」

なるべく愛想の良い声と口調で言った。

「ホント？」

ダグラスは笑った。

人は外見で判断してはいけない。これは昔からの教訓だ。もしかしたら、この人は善人かもしれない。

その時、鉄製の扉が開いた。

「ダグラス！この中途半端野郎！」

トカゲのように乾いた皮と2つに裂かれた上唇を持つ男がやって来た。

「この獲物は俺のだろうが！」

「ゴメン！ダン！ゴメン！」

ダン……これがあの男の名前か？

ダンはダグラスを平手打ちした。

「この糞忌々しい弟が！俺達は今夜残りの連中を殺しに行くんだよ！」

残りの連中？どういう意味かしら？

さらに誰かが入って来た。

ベルゼブブだった。

「ダン、ダグラス、準備しろ」

ダグラスは部屋の右側の壁にある大きな扉を開けた。

中は武器庫のようだ。

ダン是世界最強の回転式拳銃、S & W M 5 0 0 を取り出し、ベルトに挟んだ。

ダグラスは大昔に斬首刑の際に使われていた処刑用の斧を持ち出した。

「分かってると思うが、フランス人は殺すなよ？」

「分かってる、俺もダグラスもそんなへまはしない」

「とりあえず、シビルとホワイトも来る」

3人は部屋を出た。

立花は呆然とベッドに座っていた。

が、次の瞬間にはダグラスが部屋に入り込み、立花の口を塞ぐとどこかに連れて行った。

ダグラスはどこかの部屋に入れた。

そこは中心にベッドがあり、周りにテレビやラジオなどの家具が置いてあった。

「ココ安全、キミハボクノモノ」

立花は気味悪く感じた。が、ダンやベルゼブよりはましに思えた。

「キミハボクノ……ママトノ約束」

立花は、ただダグラスを見ていた。

信二たちはバスに戻った。

「どうする！どうやって立花たちを救う！？」

紘輝は怒鳴り声で信二に言った。

「落ち着け！今対策を考えてる！」

真希がそう言えばとばかりに口を開いた。

「佐々木ちゃんは確かGPS発信機を持っていたはず」

「確かか？」

信二と紘輝は同時に言った。

「荷物を入れてる場所に装置の信号を受信できる装置か何かがあっ

たはず」

「「確かか？」」

真人はバス乗車している全員を見た。  
まだ寝ている。

紘輝は金属バットを握りなおした。

「よし、GPS受信機を探そう」

信二と紘輝は外に出た。

荷物を入れる場所は開いていた。

2人は奈々子のリュックサックを取り出し、中身を確認した。

ノート型パソコンとスマートフォンのような装置があった。

「これの内どつちかだ」

2人はバスに戻った。

紘輝はバスの入り口を閉め、パソコンを開いた。

パソコンの画面に赤い点滅があった。

「これか？案外近いな」

「救出に向かうには武器が少なすぎるな」

現状ではモータールにあつたワルサーPPKと金属バットしかない。

奈々子の日本刀は異形者に奪われた。

『ダンとダグラスが始末する』

信二と真人は一瞬痙攣を起こした。

真斗がトランシーバーを持っていた。

『ホワイトとシビルは援護するんだ』

恐ろしく冷たい声がトランシーバーから聞こえた。

「それはどこに？」

真人は驚いたような声で聞いた。

「アンナ…って言う人が持ってた…」

「人じゃない化け物だ！」

紘輝は怒鳴るように言った。

「さて、静かに」

『銀髪の女は監禁する。フランス人は生け捕りにしろ』

ソフィーは殴られたような顔をした。

「何で私？」

『全員バスに居る。チャンスは今夜だ』  
起きている全員が背筋に寒気を感じた。

『他のクラスは全員殺した。後は2組だけだ』

他のクラスは全滅したのか……？

『以後、今作戦を真紅計画コードレッドと呼称する』

真紅計画　コードレッド

『連絡は終わり』

トランシーバーからは何も聞こえなかった。

「紘輝、周波数をメモしろ」

紘輝は周波数をメモした。

「悪いが救出は後になるがいいか？」

紘輝は渋々うなずいた。

「今は防衛のことを考えよう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8721x/>

---

ラジオアクティビティ

2011年11月17日03時23分発行